

光と影の表現者「小林清親」展

会期: 2018年1月6日(土) ~ 3月31日(土)

会場: < GAS MUSEUM がす資料館>ガス灯館2階「ギャラリー」

ごあいさつ

GAS MUSEUM がす資料館では、2017年度第四回企画展として、2018年1月6日(土)から3月31日(土)までの期間、「光と影の表現者「小林清親」」展を開催します。

<GAS MUSEUM がす資料館>は、1967年4月29日に小平の地で開館して以来、2017年4月で開館五十年を迎え、多くの方にご来館頂くことが出来ました。

下級武士の子として浅草に生まれた小林清親は、明治維新という時代の大きな変化の後、刀を筆に持ち替え、明治9年(1876)から発表した木版画シリーズ「東京名所図」で人々の注目を集めました。後に「光線画」と呼ばれる一連の作品で清親は、江戸から明治へと時代の変化に翻弄される東京の姿を、夜の街に灯るガス燈の光や、陽光や月光などの自然光の微妙な印影や色の変化を描きました。しかし清親は明治14年(1881)以降、「光線画」の制作をやめ、「ポンチ絵」と呼ばれる風刺画や歴史画、戦争絵などを描き、晩年は肉筆画を多く手がけました。今回は開館五十周年第四回企画展として、木版画の技法を駆使し、明治はじめの東京風景を現在の私たちへ、情感を込めて伝えてくれる小林清親の五十点の収蔵美術コレクションを、期間中一部作品の模様替えをおこない紹介します。

GAS MUSEUM がす資料館

■展示作品一覧

【展示解説】

学芸員 高橋 豊

【小林清親 略歴】

弘化4年(1847)幕府の本所米蔵の役人小林茂兵衛、母ちかとの間に生まれました。幼名は勝之助といい、末っ子の第九子でしたが、文久2年(1862)に父親が病死すると、十五歳で家督を継ぎ、元服して清親と名前を改め、幕府に仕えることとなりました。

戊辰戦争の後、幕府が崩壊して徳川家が静岡に移るのに伴い、一家を挙げて静岡に移りました。しかし明治7年(1874)5月に江戸から東京と名前を替えた地に戻りますが、同年9月に母親が亡くなると、絵を本業とするようになりました。

転機となるのは明治9年(1876)に版元松木平吉より出版された、5点の東京風景を描いた作品が評判を呼び、以後明治12年(1879)からは版元福田熊次郎よりも「東京名所図」を刊行しますが、明治14年(1881)のある時期より手がけるのをやめてしまいました。その後清親は、風刺画や歴史画、新聞挿絵などを描くほか、日清・日露戦争時は戦争画も手がけました。晩年は肉筆画などの作品などを描きますが、大正4年(1915)11月28日に六八歳の生涯を閉じました。

<「東京名所図」について>

明治9年(1876)8月31日に版元松木平吉より出版された、5点の作品から始まった一連の東京名所図は当時評判を呼びました。

作品は東京各所を取り上げていますが、必ずしも「名所」と呼ばれる場所を取り上げているわけではありません。

開化風俗を大きく取り上げている作品、江戸の風景の残る構図のなかに、街燈や人力車などの開化風俗をアクセントとして取り入れている作品、江戸時代とほぼ変わらぬ風景を描いている作品など、93点が制作されました。

作品を特徴づけているのは、ぼかしや彫りの技法を駆使して、ランプなどの新しい明かりや、陽光や月光などの自然の光が照らす様子と、光が生み出す影が交差した、一瞬の風景を描いているところです。

明治12年(1879)からは、版元福田熊次郎からの出版が多くなりますが、明治14年(1881)を境に清親は、「東京名所図」シリーズを制作終了してしまいました。はっきりとした理由は分かりませんが、作品の需要がなくなったわけではなく、弟子の井上安治は師の清親の技法を受け継ぎ、その後も作品を制作しました。93点の作品は、シリーズとして計画されていたわけではなかったようです。現在ではこれらの作品を称して「光線画」と総称しますが、この言葉が出版当時から使われていたのかは確認できないものの、作品全体を端的に表していると言えます。



1) 東京新大橋雨中図

小林清親

明治 9 年(1876)

2) 柳原夜雨

小林清親

明治14年(1881)

3) 五本松雨月

小林清親

明治13年(1880)

江戸時代より五本松の地は、月の名所として知られていました。

作品では、開化の象徴のひとつである蒸気船の明かりとともに、雲間から月明かりがわずかに見え、変わらぬ名所と変わりゆく時代の変化が、対比して描かれています。

4) 九段坂五月夜

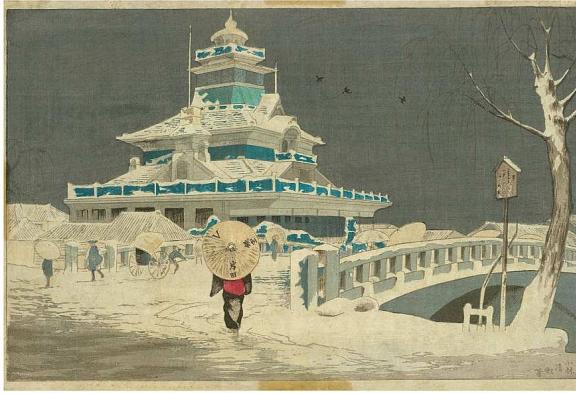
小林清親

明治13年(1880)

5) 新橋ステンション

小林清親

明治14年(1881)

**6) 海運橋(第一銀行雪中)**

小林清親

年代不明

7) 旧本丸雪晴

小林清親

年代不明

8) 駿賀町雪

小林清親

年代不明

現在の日本橋三越付近を描いており、建物に挟まれた道の先に、日本銀行があります。

作品とほぼ同じ構図を写した写真も残っており、この場所を表現する構図の一つになっていたことが推測できます。

9) 上野東照宮積雪之図

小林清親

明治12年(1879)

現在も変わらぬ姿を見せる、上野東照宮境内を描いています。

緑の木々に囲まれた境内に降り積もる雪を、色の対比で表現するほか、作品構図の消失点に赤い社殿を配置することで、作品に奥行きを出しています。

また、ほぼ同じ構図で夜景を描いた作品も残しています。

**10) 江戸橋夕暮富士**

小林清親

明治12年(1879)

11) 浅草藏前夏夜

小林清親

明治14年(1881)

**12) 日本橋夜**

小林清親

明治14年(1881)

13) 本町通夜雪

小林清親

明治13年(1880)

夜降る雪の中を急ぐ馬車の一瞬を描いています。作品では雪をガス燈や馬車のランプ周辺のみ描き、明かりの照らす範囲と雪の降る様子がともに表現されています。また馬の足下に落ちる影が、いくつもの方向に濃淡をつけて表現されているところから、馬車を照らすガス燈が複数あることが判ります。

14) イルミネーション(復刻・復刷版)

小林清親

年代不明

展示作品は「復刻・復刷版」といわれていますが、第一回内国勧業博覧会で灯された、花ガスを眺める人々を描いています。

博覧会が開催された明治10年(1877)時点では、会場の上野公園へガスは布設されておらず、このときは、ゴム引きの袋に詰めたガスを、運搬して点灯したのではないか、と考えられます。

15) 隅田川枕橋前

小林清親

明治13年(1880)

16) 品川海上眺望図

小林清親

明治12年(1879)

17) 萬代橋朝日出

小林清親

明治13年(1880)

神田川右岸を上流方向から万世橋を眺めた、明け方の風景が描かれています。

万世橋までは、明治8年(1875)3月までにガス燈が設置されますが、橋を越えて上野までガス燈が設置されるのは、明治14年(1881)1月の事になります。

18) 隅田川小春嵐

小林清親

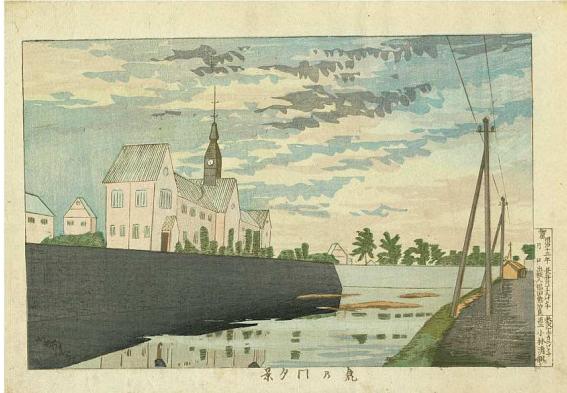
明治13年(1880)



19)一石橋夕景

小林清親

年代不明

**20)虎乃門夕景**

小林清親

明治13年(1880)

21)東京橋場渡黃昏景

小林清親

明治9年(1876)

現在の隅田川にかかる白鬚橋附近を描いています。作品名にあるように夕暮れの川面を進む渡し船の風景で、高く空を飛ぶ水鳥や向こう岸の木々、船の舳先や艤を操る船頭などに、朱色を重ねることで、夕日に照らされていることが表現されています。

22)道灌山夕日暮

小林清親

明治12年(1879)

**23)両国花火之図**

小林清親

明治13年(1880)

24)池の端花火

小林清親

明治14年(1881)

不忍池の花火を楽しむ様子が描かれています。作品「両国花火之図」と異なり、花火は光の尾を引きながら落ちる姿で描かれ、岸辺から眺める人々は、花火の輝きによりシルエットで表現されています。

25)隅田川中洲水雷火

小林清親

明治14年(1881)

26)東京銀座街日報社

小林清親

明治9年(1876)

**27)大伝馬町大丸**

小林清親

明治14年(1881)

28)堀留繁花の図

小林清親

明治12年(1879)

作品は日本橋の堀留にあった畠表問屋清水九兵衛の店先の様子が描かれています。陽光に照らし出されたイグサの茎の緑が鮮やかに描かれています。

29)上野公園画家写生

小林清親

年代不明

30)上野六角茶屋

小林清親

明治13年(1880)

**31)愛宕山の図**

小林清親

明治11年(1878)

32)多目伊希

小林清親

明治14年(1881)

33)赤坂紀伊國坂

小林清親

明治13年(1880)

34)根津神社秋色

小林清親

明治13年(1880)

根津神社の境内が題材として取り上げられていますが、紅葉を迎えた木々の色よりも、楼門の朱の色が目を引きます。展示中の作品では、現在もほぼ同じ風景を見ることができます、数少ない作品です。

35)向島桜

小林清親

明治13年(1880)

36)第二回内国勧業博覧会内美術館噴水

小林清親

明治14年(1881)△

37)第二回内国勧業博覧会表口

小林清親

明治14年(1881)■

38)明治十四年一月十六日出火**両国焼跡**

小林清親

明治14年(1881)

明治14年(1881)1月16日に起きた、大火後の様子を描いています。

赤茶けた焼け跡に立つガス燈には変わらず火が灯り、一変した風景のなか変わらぬ姿を描くことで、より一層大火後の街の変化が際立ちます。

39)明治十四年一月廿六日出火**浜町より写両国大火**

小林清親

明治14年(1881)△

40)明治十四年二月十一日夜出火**久松町ニ而見る出火**

小林清親

明治14年(1881)■

41)今戸夏月

小林清親

明治14年(1881)

一人の人物が作品の中で大きく取り上げられている数少ない構図の作品です。

室内には石油ランプに照らされた女性と、窓辺に鉢植えが置かれ、窓の外には、昇り始めた月に照らされた遠方の大樹がシルエットで描かれています。

42)大川岸一之橋遠景

小林清親

明治13年(1880)

43)今戸有明樓之景

小林清親

明治12年(1879)

44)御茶水螢

小林清親

年代不明

45)高輪牛町朧月景

小林清親

明治12年(1879)

高輪付近の海中に築いた、築堤上の線路を進む蒸気機関車の姿が描かれています。

この新橋横浜間の路線にはカウキャッチャーの付いた機関車は走っておらず、清親が必ずしも当時の様子を正確には描いていないことが見て取れる作品です。



46)川口鍋釜製造図

小林清親

明治12年(1879)

47)千ほんくい両国橋

小林清親

明治13年(1880)



48)梅若神社

小林清親

年代不明

作品の特徴は、画面全体に斜めに走る白抜きの線で、雨の勢いを表現しているところにあります。

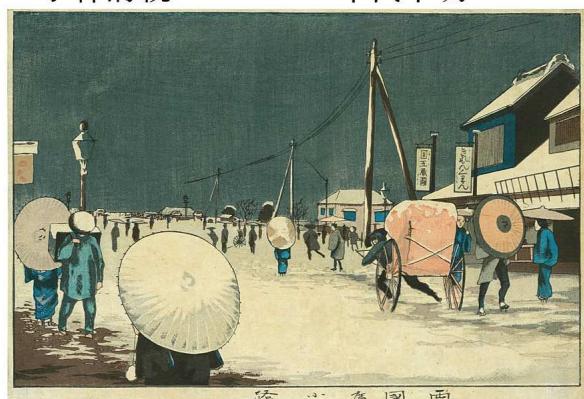
作品に使用されている各色の版が揃うように版木を彫り、ずらすことなく刷る技術の高さに驚かされます。



49)不忍池畔雨中

小林清親

年代不明



50)両国雪中

小林清親

年代不明

※展示期間中、一部作品の展示替えを致します。

展示替え作品は、作品後ろの「記号」を参照願います。

前期：1／5～2／12 記号「△」

後期：2／14～3／31 記号「■」

おもな参考文献

最後の浮世絵師 小林清親 吉田漱編 蝸牛社 1977年

明治の浮世絵師「小林清親」 静岡県立美術館 1998年

「清親と安治」光線画の時代

山口県立萩美術館・浦上記念館 1998年

謎解き浮世絵叢書 小林清親 東京名所図 (株)二玄社 2012年

「小林清親」文明開化の光と影を見つめて

練馬区立美術館 1998年

GAS MUSEUM がす資料館 企画展ご案内郵送申込について

ご来館ありがとうございます。これから3ヶ月ごとに開催されます、「GAS MUSEUMがす資料館 企画展」の

ご案内はがきの郵送をご希望の方は、官製ハガキに ①氏名 ②連絡先住所 ③年齢 ④電話番号 ⑤感想・

意見 ⑥今後希望する企画展、をご記入の上、下記の住所までお申し込みください。

次回より約1年間、毎企画展ごとにご案内ハガキを無料で郵送します。

(ハガキ持参で来館された方は、そのまま継続して登録されます)

〒187-0001 東京都小平市大沼町4-31-25 GAS MUSEUMがす資料館「ご案内ハガキ」係

TEL(042)342-1715 FAX(042)342-8057

《当館のお客様情報(個人情報)は、当館イベント運営に必要な業務を含め、当館に関連する企画、及びサービスのご案内のため使用いたします。》